

---

# R e m e m b r a n c e

幸谷遥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

R e m e m b r a n c e

### 【Nコード】

N 4 8 8 8 A

### 【作者名】

幸谷遥

### 【あらすじ】

主人公が旅をしているという話です。初めてなので目を通していただけたら光栄です。

もはや私は異国を持っていなかった。彼の地を踏むことを私が夢見ることは失われていた。その喪失が私にもたらしたのは実であり虚であるようなのだ。私は新たになり、旅立たねばならなかった。ただちに荷物を纏め、恋人のもとへ挨拶に行こうとしたが顔を思い出すことが出来なかった。女もまた見失った異国の住人であるらしかった。そして私の名を呼んでくれる人々も一人としていなくなっていた。私は堪えられないほど辛くなって涙した。思わず指にくった涙は味がなかった。

気持ちが悪く、私は他人同士でひしめく車内にいた。皆、この列車が発つのを待っている。どの顔も誰ともいたくないと言いたげに下を向いている。私は少し気が楽になった。ここでならどの人間も誰かと一緒にいながら独りきりであることに気が付き、また哀しくなればここに来ればよいのだろうと思った。本当に、家族連れであろうとお互い気まずそうに頭をつき合わせて無口だが、真に居心地が悪いのではないのだ。やがて私は揺られながら眠っていた。目を開けるとまず私の荷物が盗まれていることに気付いた。何ていうことだろう。何時の時分であれど、こそ泥は健在なのだ。腹立たしいが致し方あるまい。盗みに走るとき感情は、愛にまつわる人間のそれと同じで人類普遍の欲求であるのだから。装った乙女で表される地上の愛というものは複雑でありその正体に凡人が触れようとすることはできない。ああ何を口走っているのだろう。…それならば天上の愛とは何なのであるうか。

また仕切り直しである。幸い切符と財布は手元にあったので私は目的地へ辿り着くことが出来た。ここで目的地などと言っても明確な意志が介在しているわけでもなく、ああこの辺りではないだろうかと、意味もなく路線を選んだ結果であった。身軽な身体で無人のプラットフォームに立つと、私は自分が見知らぬ土地に来ている実

感を持った。異国とは斯くのような思いを引き起こすものではなかったかと頭をかすめたが、つまらないことだと打ち消した。

降り立った土地は獣の頭をもつ人間が暮らす土地であった。ライオンを始めとして、猫、犬、鷲、鹿など古今東西の動物達の頭部が見れた。

宿の場所を聞こうと早速二十日鼠の男に尋ねた。

「東の町に孔雀の御宿、西には象の御宿、南町などは水牛どもの宿場がありますし、北には一番安い羊の宿がございます。」

きいきい声に後悔してから私は南の方へ行った。道々、住人達が私を振り返っていった。この地に人間の頭部で住み着いた者はいなかったので、私が彼らにとって異邦人であることは明白だった。子供などは素直なもので、珍しげにこっそり私の後をついてくる者が数名ばかり。宿まで行けば私と同じ立場の人間もいるだろうところであって、なるべく余裕があるように足を運んだ。

水牛の宿場町は大きな川を越えた所にあつた。大きく湾曲した橋を渡ると下方で荷物を運ぶ船がすれ違っていた。船を漕ぐ人間の顔はやはり何かの獣であつて、私はどんどん私の顔がちゃんと人間の顔のままであるか自信がなくなっていた。

手鏡は荷物とともになくしたし、水面は確かめるには遠すぎた。ふらふらして歩が乱れ始めた頃合いに、私は橋を渡り終えていた。道のあちこちに客が溜まつていた。この土地の人間が多いようだったが、そうでない人間もいた。二種類の人間の内、私がどちらに属しているかなど些末であるように思えてきた。どちらでもいいのだ。どちらであつても軽蔑されるのだし。

「いらつしゃいませ。お荷物はございますか。」

水牛の尖った角が見事だった。誰彼の区別のつかないところ、この角に対する思い入れが私に人物を見分けさせた。

「いいえ。来るまでに盗られてしまいました。」

「まあそれは災難です。で、如何ほどな部屋になさいましょう。料金ならこの通り……。」

「ふふつ。財布は無事だったんで中くらいの部屋には泊まれそうだ。」

「まあようございます。足りない物、なくされた物を揃えますならば、この裏手に狐の商店街がございますのでどうぞ足を運ばれくださいまし。」

案内された部屋は三階で人通りに面した窓があった。木枠の窓を開けて、やはり木製の欄干に肘をついた。

仮性の国だった。住民の顔に真実はなかった。それは陳腐なマスクでしかなかった。私は虚を失い実に取り憑かれている。

しばらくそのまま行き交う人々を見下ろしていた。いろんな人間がいる。人通りが絶えない。ふと部屋を見返せば猫の頭がふすまを開く。

「御用はございませんでしょうか。」

茶代目当ての小間使いの少女だった。

「うん。煙草を買ってきておくれ。」

銘柄と金を持たせ再び道に目を戻す。少女が走っていくのも見えた。何だか自分が疲れていることに気がいつて目を閉じた。旅に出たことを後悔し始めた。何故逃げるようにしたのだろう。何処がいけなかったのだろう。過ぎ去ったことを何度も思い直し、ついに女、私の恋人に行き着いた。あの女は一体なんであつたのだろう。女の実在を疑う以前に自分の存在が揺らいでいる今、女の実在を証しだてることは私の存在に繋がることだった。

しかし女はここにいない。ここにいないのならほかのところにいるとも断言出来ない愚かな私がいた。誰か私の名前を読んでくれまいか。それだけでいいのであらうに。

気付けば私の手を握る者がいた。左手は依然と私の頭を支えている。右手は誰かの両手に包まれて、その形は私にとって懐かしいものだったけれど、目を開くことをためらった。

「お前かい？」

何とかそれだけをしぼり出す思いで言った。女の少しだけ暖かい

手に、力がこもった。

「お前なら俺の名前を呼んでくれ。不安なんだ。」

女が返事をしないので自分があのまま寝入ってしまった果ての夢なのかと思った。それでなければ実も知らぬ商売女が押しかけて来たのだ。

「目をお開けください。」

私ははっとした。声は違えようもない愛しい女の声だった。どうしてこの人の存在をうたぐってしまったのだろう。透ける頬を持つ美しい女。長い睫毛で瞳が隠れてしまうところが好きだった。

女は私の手を取っている。

「あなた。あなたが私のことを忘れてしまっても、私はあなたとずっとこうして手を繋いでいたいと思いましたのよ。」

肩を震わせ、涙が溜まっている女を抱き寄せた。夢であるはずがなかった。

「いつかあなたが私を迎えに来てくださること待っていますわ。必ずそうしてくださいませ。お願いします。」

まあいじらしいことよ。私も必死で約束をした。そして一瞬のまばたきの間に女は姿を消してしまった。

短い逢瀬の余韻に浸る間もなく猫の少女が頭を覗かせた。駄賃をやると不審そうに私を見た。

「さつきはしませんでしたけどいい匂いがします。」

女の残り香だった。少女の言葉が私に更なる確信を持たせた。

私は実を失って虚に取り憑かれていたのだ。からくりの正体は見えないが、旅の目的は見えた。女と約束したからそうするのだ。そして旅は続いている。

さて、私は気が狂ったのだろうか。自分の中にはそういう思いもある。これはまともな考えではなく、女も異国という憧憬も全て、旅をしていることすら私の妄想なのでは？

私はすぐに答えられる。それで構わないと。気が狂っていようと、いまさら正気に戻ったところで私は生きられまい。私には誰もいな

いのだ。だから私は女と異国を求め続けよう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4888a/>

---

R e m e m b r a n c e

2010年10月8日14時21分発行